

Title	書評：鈴木真弥著『現代インドのカーストと不可触民：都市下層民のエスノグラフィー』慶應義塾大学出版会、2015年
Sub Title	
Author	舟橋, 健太(Funahashi, Kenta)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.151- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：鈴木真弥著

『現代インドのカーストと不可触民——都市下層民のエスノグラフィー』

慶應義塾大学出版会、2015年

舟橋 健太

本書は、2016年度の「第11回樫山純三賞」（樫山財団主催）と「第28回アジア・太平洋賞特別賞」（アジア調査会・毎日新聞主催）をともに受賞した、各方面で高い評価を得ている著作となる。他所にてすでに複数の書評も出されていることから、屋上屋を架す感は否めないが、特に評者自身も「不可触民」研究に従事する身として、僭越ながら評を行いたい。

はじめに、本書の内容について、章立てに従いつつ確認しておきたい。本書は、現代インドにおける「カースト、不可触民差別の持続性や変容を読み解く」（p.7）、すなわち、「カースト問題と不可触民制からの解放とは何か」（p.232）を問うことが主題として掲げられている。そのうえで、第1章「カースト、不可触民差別は過去のものか？」においては、カースト研究、不可触民（ダリト）研究、清掃カースト研究、それぞれの先行研究が手際よく整理され、それらを受けての本書の視座が提示される。要点は次の三点である（p.24-27）。(1) カースト的区分の実体化、顕在化、アイデンティティ化を踏まえて、政策とその背後にある思想（特に M. K. ガンディーの不可触民解放をめぐる運動と思想、および現代にまで至るその継承と影響）を検討、(2) カースト間の格差に着目して、「生業」との関係から発展格差を検討、(3) カースト、不可触民をめぐる人びとの内面的問題についての検討、となる。

これらの問題設定・分析視座のもと、以降、第2章「デリーの横顔」では調査地の概要とデリーの清掃カーストに関する統計的データ、および著者の調査について述べられる。第3章「清掃カーストとされる人びと」では、概括的には不可触民および指定カーストとされるカテゴリーの形成史が、より具体的には清掃カーストとされるカテゴリーの形成史が、特にイギリス植民地行政との関係から確認される。また国勢調査を用いながら、不可触民カースト間における格差に注目しつつ、各カーストと「伝統的職業」との関連も分析されている。

第4章「カースト制批判と不可触民解放をめぐる思想と政策——ガンディー、ガンディー主義者による清掃カースト問題の『解決』」では、不可触民解放運動の歴史的展開をたどりながら、特に M. K. ガンディーの活動と思想を中心に分析を行う。著者によれば、現在にまで至る不可触民問題に関する政策の主流においては、ガンディーの思想を色濃く継承している特徴があり、そこから少なくない問題が生じているということが顕示される。とりわけ、ガンディー主義を強く引き継いで活発に活動を行う NGO 組織「スラブ」に、問題の顕著な現出をみている。国際的にも高名な NGO であるスラブに関する詳細な記述は、当該組織の成果と課題を考えるうえで、貴重なデータを提示するものとなっている。そこでは、国際的な高い評

舟橋健太「書評：鈴木真弥著『現代インドのカーストと不可触民——都市下層民のエスノグラフィー』」『三田社会学』第22号（2017年7月）151-156頁

価と相反するともいえる、差別構造の根本的な変革につながらないスラブの活動方針の限界や、清掃人当事者があくまで受動的立場に留まるスラブの組織的問題など、清掃カースト当事者からの批判（そして著者からの批判的見解）をみることができる。

以上の不可触民および清掃カーストをめぐる歴史や運動、社会的文脈の記述をもとに、以降では、具体的な著者の現地調査に基づくデータの提示と分析が行われる。第 5 章「パールミーキ住民の社会経済的状況」では、デリーにおけるパールミーキの人びとの社会経済的状況について、三つの調査地区の設定からの、合計 135 世帯に対する戸別訪問調査の結果が詳述される。そこでは、「国勢調査では詳らかにされないカースト内婚の状況のほか、就業形態、移住パターンについて」(p.159) の確認がなされている。著者自身も認識しているように、調査地区の設定の妥当性など、「調査対象の実態把握という点でいくつかの問題を抱えている」(p.138) が、しかし、個人のカーストを特定することがきわめて困難なデリーという大都市において、詳細なデータを収集し、清掃カーストの人びとの生活状況の一端を提示してくれる本研究の意義は大きい。

続く第 6 章「清掃カースト出身者の内なる葛藤と抵抗のかたち」では、よりミクロな状況に着目して、「清掃カースト」という出自に当人たちがどのように向き合っているか、就学、就職、結婚といったライフステージのさまざまな節目に現出する自身の「ダリト性」について、かれらの語りから分析を行っている。ここでは、特に社会経済的向上を果たした、いわばエリートの人びとが対象となっていることから、とりわけ、現在の成功とつきまとう出自との齟齬に所以する葛藤の様相が描かれる。また「パールミーキ」という名乗りにみられるアイデンティティの生成・確立について、ヴァールミーキ詩聖崇拜の近年における興隆から考察されている。

第 7 章「清掃カーストの組織化と運動——清掃労働者組合から公益訴訟へ（1960 年代—2010 年代）」では、パールミーキの人びとによる運動を歴史的にたどり、清掃労働者組合の盛衰と、近年の司法の場への傾注、特に公益訴訟の展開について検討が行われる。後者については、現在進行形の動きであるということもあり、さらに仔細なデータが欲しいところではあるが、きわめて興味深い動向であることは確かである。最後に第 8 章「パールミーキの困難と挑戦のゆくえ」において、本書の要点の再確認と今後の課題が提示されている。

以上、やや詳細に本書の内容を確認してきたが、本書を特徴づけ、その価値を際立たせているのは、ひとつに、その研究対象の設定であるといえよう。すなわち、「都市（首都デリー）」の「清掃カースト」に関する調査・研究という点である。重要なのは、単にこうした研究対象を設定した、ということではなく、著者が、こうした多側面におよぶ困難を伴うと推察される研究に関して、現地調査と文献調査とを駆使し、真摯に分析・考察に努めたということである。いまひとつの特記すべき本書の特徴・価値は、カースト、不可触民問題の現代的特質を考慮したうえで、下層とされる人びとの現在の動向と課題を分析・考察したことにある。なかでも、下層民から登場している「エリート」層への注目と、かれらが主導する新しい展開を予想させる運動の分析は、著者の今後の研究のさらなる進展に、おおいに期待を抱かせる点となっている。

る。

しかし、こうした本書の特徴・価値は、一方で本書の課題とも関連すると考えられる。ここでは、大きく二つ、都市部の調査であるという点と、被差別民のなかでも特にエリート層が主たる対象となっているという点について、以下に述べていきたい。

まずは、本書の舞台が都市部にあるという点である。特に村落と比較したうえでの都市の特性として、「匿名性」ならびに「無関係性」を挙げることができよう。とりわけ被差別の出自を有する人びとにとって、ことさらその出自を明らかにすることはないと想定されるなか、これら都市に生活するうえでの特性は、被差別の人びとに特に強く関連すると考えられる。本書において、自分のカーストを隠す、あるいは自分のカーストを知らずに育つという状況が取り上げられ、所以する葛藤の様相が描かれる（第6章）。これは、都市部ゆえの状況とそこからくる「怖れ」であると捉えられるが、こうした匿名性の徹底は、やはり都市であるからこそ可能となると考えられる。「被差別民によくみられる態度としての徹底した身元隠しはインドの場合、ほぼ不可能」（p.241）とあるように、多くの被差別カーストが経験する、自身のカースト（「ダリト性」）から逃れられない、あるいは名指されざるを得ない状況を考えるにあたって、よりあからさまにかつ直接的に表出する村落部での様相をみることの重要性は、依然大きいものがあるだろう。

また、都市部での調査は、いきおい、当初築いたネットワークに頼らざるを得ず、またそのネットワーク外に大きく拡大することは容易ではないと考えられる。著者自身、本書の課題として「他の不可触カーストとの比較分析を十分に論じることができなかった」（p.245）と述べるが、本書において、（不可触カーストに留まらず）清掃カースト以外の人びとの姿をみることは少ない。これはひとつに、著者も重視する（p.201の注2）、被差別の問題を考えるにあたってきわめて枢要となる「自尊心」の考察において、限界が生じてしまうだろう。すなわち、自尊心の根幹をなす自己意識と他者認識の后者、つまり他者からどのように認識されているかという観点における分析を突き詰めることが困難になっていると考えられる。またもうひとつに、清掃カーストの社会経済状況や内面的問題に関する詳細なデータの提示と分析に反比例するように、他の不可触カーストについては、統計的データで推し量られるに留まっているという難点がある。具体的に記せば、とりわけよく引き合いに出されている「先進」とされる不可触カーストのチャマルであるが、カテゴリーとしての「チャマル」の記述はあるが、いち個人としてのチャマルが登場することはない。これは、パールミーキの人びとの実際の生活において、具体的なチャマルとの関係や接触がない（あるいは少なくともみえない）ことに所以すると推察されるが、主にチャマルの人びとを対象に調査研究に努める評者にとっては、その内的多様性があまりにも簡単に捨象されているとの感を抱かざるを得ない。

決して人口の多寡でのみ判断するものではないが、約68.9%（8億3374万8852人）の人びとが「地方 rural」在住であるということからも（2011年の国勢調査データより http://www.censusindia.gov.in/2011census/population_enumeration.html）、調査の舞台を都市に留め

ず、さらに展開していくことから得られるデータの重要性には大きなものがあると考えられる。たとえば、本書で中心的に取り扱われる都市に住む活動家の、出身村落における他者関係を追究していく道などもあるのではないだろうか。

もう一点は、上述の調査ネットワークの制約とも関連するが、とりわけ微細な聞き取り調査においては、被差別民のなかでもエリート層が主たる対象となっているという点である。特に第 6 章と第 7 章の記述において中心を占めるのは（この二つの章にこそ、著者のオリジナリティが強く出ており、かつ興味深いところであることは、改めて強調しておきたいが）、こうしたエリートの人びとである。もちろん、出せなかった（あるいは出さなかった）データもあろうと拝察するが、インタビュー対象者の一覧（p.168-169）にみられるように、そこにはある一定の偏りが認められる。具体的に挙げれば、20 人のインタビュー対象者のうち、男性が 18 名に対して女性が 2 名、カースト関連の運動とのかかわりがある人が 15 名（うち指導者 11 名）で、かかわりをもたない人は 5 名となっている。性別の偏向については、特に、第 5 章で明示された「パールミーキの女性労働者は組織・非組織部門の双方で清掃業に集中している」（p.159）という実態を考えた場合、やはりインタビューにおける微細なデータが欲しかったと強く思うところである。

そしてなにより注視すべきは、職業的偏りである。自身が清掃業に従事した経験を有する人は、20 人のうちで 1 人（かつてデリー市自治体清掃部門の衛生オフィサー）を数えるに過ぎない。もっとも、父親（あるいは祖父）の職業に目を移せば、20 人中 9 人について、清掃業との回答をみることができることから、まったく関係を有さないとははいえないが、しかし、ここにある限界は生じてしまっているだろう。つまり、第 6 章で詳述される「内なる葛藤と抵抗」は、自身がすでに清掃業からは離れたところにいる立場から（そしてそれゆえにこそ）生じるもので、いま現在清掃業と深くかかわる（かかわらざるを得ない）人びとの内なる葛藤や抵抗については、本書から何うことはできない。「自分と家族、親族全員が清掃業とのかかわりをいかに断ち切っているか（断ち切ろうとしているか）を筆者に理解してもらおうとする強い熱意」（p.167）を感じ取った著者であるが、それでは、現在進行形で、清掃業とのかかわりを断ち切れない人びと（かかわらざるを得ない人びと、強くつながっている人びと）に関しては、どのような理解が可能なのだろうか？ また、「コミュニティ内部では基本的に、清掃労働を敬遠し、かかわりを恥じらう態度がみられることから、清掃への差別観が再生産される」（p.167）とあるが、こうしたネガティブな意識しかないとした場合、「清掃人カースト」であることのアイデンティティは、清掃業との関連において（そして清掃カースト内部における差別関係として）どのように考えられるのだろうか？（この点は、後述する「パールミーキ」としての名乗りに含まれる価値についての考察ともかかわる。）換言すれば、本書からは、清掃労働に現在も実際に従事する人びとの姿が、その生活様態や語りを含めてみえづらいという難点があり、ゆえに、本書はすぐれた「清掃カースト研究」といえるが、「清掃人研究」というには若干の躊躇が否めないのではないだろうか。

最後に、著者も重視している「パールミーキ」との名乗りについて述べておきたい。ヴァールミーキ詩聖への崇拜と関連づけながら（ゆえに対立もはらみながら）、パールミーキというアイデンティティが、清掃カースト内部において形成・共有される動きが示されるが、しかし、パールミーキというアイデンティティの確立と強調に、人びとがどういった価値観を付与しているのか、明白に読み取ることはできなかった。本書において、清掃カーストの労働・生活環境の改善を志向する運動や活動の歴史が詳細に跡づけられるが、しかし、労働・生活環境の改善だけでは解決・解消され得ない「観念（＝差別観、蔑視、不浄視）」に対してどのように取り組んでいるのか、伺うことはできない。「パールミーキの運動は、蔑視の根源とされた『清掃労働』の問題を前面に出すことでカースト内部の結束力を高め、労働・生活環境の改善を志向するものであった」（p.226）とされるが、これは、著者が批判的に検討を行った、ガンディーを嚆矢とする会議派および独立インドの政策の方向性と大きな相違はないのではないだろうか。すなわち、労働・生活環境の改善だけでは解決・解消され得ない観念的問題に、どのように取り組むことができるのかをこそ、問う必要があるだろう。そしてその考察の糸口は、ひとつ、パールミーキと名乗りを尋ねることができるのではないだろうか。つまり、「自我意識として確立されつつある『パールミーキ』の名のもとに、かれらが解放と地位上昇に向けてそれをどのように戦略的に活用しているのかという点に注目することの重要性を強調したい」（p.242）とあるが、とりわけ、「パールミーキ」という名に、かれらがどういった価値を見出し、付与しているのかという観点から、洞察する必要があるのではないだろうか。検討すべき課題として、「カーストを超えた支持層の拡大に向けて、どのような取り組みがなされるのか」（p.242）と記されるが、パールミーキと名乗りとカーストの超越がどういった関係にあるのか、どのようにして両立が可能なのか、明記されることはない。そこでの要点は、ひとつに、「パールミーキ」という名に付与される価値観と普遍的価値観との関係にあるのではないかと評者は考えるが、どうであろうか。

こうした考察は、価値観の転換として、「被差別性を『異なる文化』や『多様性のひとつ』としてポジティブに捉えなおす可能性を打ち出したことも、反差別運動がもたらした大きな成果であった」（p.232）として一般論的に論じられている。皮肉なことに、のちにその表層的言及だけが一人歩きしてしまった感があるが、「清掃」という行為をポジティブに意味づけ、捉え直そうと努めたのは、ガンディーその人ではなかっただろうか。上述した点の再記となるが、パールミーキという名乗りの意味づけをめぐる、非清掃業に就いている人びとの視角からではなく、実際に日々「清掃行為」を行っている人びとが、そこにどういった価値観を求めているのか（あるいは付与しているのか）、伺いたいと強く願うところである。

以上、思うに任せて、調査手法的に相反する「ないものねだり」の感も否めないコメントを書き連ねてしまったが、それも、本書がさまざまな側面における現在の課題を喚起する良書であることの証左である。また、根源的課題に真摯に取り組む著者の姿勢に感銘をおぼえ、著者のこれまでの研究内容と今後の研究展開におおいに関心と期待を寄せる身として、敢えて記さ

せていただいた文面も少なくない。いずれにしても、本書が、現代インドにおけるカースト、不可触民問題、さらには、広く差別問題に関心を有する学生・院生・研究者にとって、必読の書であることは改めていうまでもない。今後の著者の研究のますますの充実と発展を念じて、長文に及んでしまった本評を閉じたい。

(ふなはし けんた 人間文化研究機構／龍谷大学)